Title:sinpou4664.ec7 Page:1 Date: 2013/02/27 Wed 11:37:19

教団新報

定　価　1部140円（本体133円〒共200円）
予約購読料　1年分　〒共　5,000円
紙代のみ　3,500円
振替 00140－9－145275
本紙を購読ご希望の方は、前金をそえて、お近くのキリスト教書店へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所　日本基督教団
169-0051　東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内　電話03(3202)0546
FAX03(3207)3918
発行人　内藤留幸
編集主筆　竹澤知代志
印刷所　株式会社きかんし

クリスマスメッセージ

マタイによる福音書25章31～46節

主イエスに出会う旅

山田称子

クリスマスを迎える準備は、自分の誕生日を待ちわびている子どものように「まだ来ないの？」と何度も親に聞き、心躍らせ指折り待ち望む日であるはずです。しかし、世の中のクリスマスは、商業ベースに飲み込まれてしまった状態の名前だけの「クリスマス」となっています。この状況で、本当のクリスマスを伝える教会の重要な使命を心に受け止める日々です。

擦れ違いの旅

一年間の教会の働きの中で、一番最初にクリスマスの準備をはじめるのは、教会学校（日曜学校）の教師（リーダー）の方々であると思います。どのように今年のクリスマスを子どもたちと一緒に祝い・喜びの時とするか。迎える準備に頭を悩ます。その苦労に一層追い打ちをかけるのが、なかなか続けて出席出来ない子どもと、元気な子の自由奔放過ぎてまとまらない状態。昔も今も変わらず、自分の好き勝手をして本番にのぞみ、教師をハラハラさせてくれます。

そんな中の一人の子どもとして、私も教会学校の毎年のクリスマスを楽しんで迎えていました。クリスマスのプレゼントをもらうことだけを楽しみにしていた子どもであったと言えます。クリスマスの主役は自分であるかのごとく思っていた私に、二つのショックなことがありました。

それは親と共に行った児童養護施設ホザナ園でのクリスマスの出来事でした。（この児童養護施設は、現在も私が牧会に携わっています浦和別所教会が生み出した施設で、社会福祉法人児童養護施設として五〇人弱の子どもたちが職員と共に生活をしています）

一つは、ホザナ園でのクリスマスは自分が主役ではなかったことでした。常に自分にもプレゼントがあるものと思いこんでいた私にとって、何もないということがショックだったのです。（きっと、お菓子などいただいたと思いますが、園の子どもたちと同じようでなかったことが、ショックだったのだと思います）

ホザナ園でのクリスマス祝会の中で、職員の方々による出し物がありました。その時の出し物の内容に驚いたのが二つ目の出来事でした。それは「もう一人の博士」という題の人形劇でした。ご存じの方も多いと思いますが、この話をはじめて聞いた時でありましたので、話の中に吸い込まれるように入っていました。博士は三人しかいないと思っていましたので、「もう一人いた」とは子ども心に驚いていました。この「もう一人の博士」のアルタバンのその生涯に、またまた、感動していました。

アルタバンは、他の三人の博士たちと夜空に輝いた不思議な星を求めて旅をする計画をたてていました。しかし、約束の日に約束の場所に行くことが出来ず、置いてきぼりになり、やむなく一人で旅をすることになったのです。その旅は、主イエスと出会えず、いつも擦れ違いの旅でありました。贈り物として持参した大事な宝石を持って、主イエスの後を追いかけて行きます。何年も何年も擦れ違いの旅でした。その途中で、困っている人に、悲しんでいる人に、貧しく食を得ることの出来ない人に出会い、大切な宝石を分け与えていくのです。そして、とうとう何もなくなり自分も年老いて死を目の前にした時、十字架上の主イエスと出会うことが出来ました。主イエスは、アルタバンのなして来た良き業を知っておられ「困っている人、病んでいる人になしたことは、私にしたことなのだ」と言われました。主からのお言葉をいただいて、何一つ無駄ではなく、自分の歩んだ旅は意味があったことを知り、感謝のうちにアルタバンも死んでいくのです。

この話は、この時以来忘れられない心に残るお話となりました。クリスマス＝（イコール）プレゼントをもらう時としか考えていなかった心に、大きな衝撃となりました。

浦和別所教会（関東教区埼玉地区、埼玉県さいたま市南区）

主に渡しきる心

クリスマスのメッセージは、「すべての民をそのもろもろの罪から救う者」として主なる神より人間に贈られて来た御子イエスを、最高のプレゼントとしていただくことです。しかし、現状は子どもばかりではなく大人も人々の思いは、この地上での現実的・物質的のみに目を奪われています。思いも心も真理をみつけられず、本当に生きる意味と希望とを見出せず、直ぐ手に入りそうなものに踊らされている現実が、見えないでいます。また私たちの心が、主なる神より神の一人子を、最高のプレゼントとしていただくというこの時点にのみとどまっているならば、子どもが「クリスマスはサンタクロースがプレゼントを持って来てくれる日」と思っていることと同じではないでしょうか。

私たち人間は、神の御愛のしるしの御子イエス・キリストを心に受け入れ、その御愛に少しでも感謝を持って答えることが、クリスマスのメッセージへの応答です。

如何にこの愛に答えることが出来るか。神の一人子の身代わりの死の代価に答え、出来ることは、私たちには何もありません。アルタバンは、ただ不思議な星に導かれ救い主としてお生まれになったお方に心からの贈り物をささげることが、生きる望みとなり生涯を歩みました。「何かした」とも、「何か出来る」とも考えていなかったことでしょう。目の前に起きている困難な状況の人に、出来ることをしたということだけです。私たちは、この「自分が出来ることをする」という課題に真っ正面から向き合っていない姿があるかと思わされます。神よりの問いかけに応答していたとしても、主の問いかけを聞く前に答えを自分で決めているのです。「それ以上は無理です」と。その後には、問いかけがなかったことにしてしまいます。

私たちのために神が、主イエスが、なして下さった贈り物は中途半端のものではありません。身代わりの「死」に、「半分死にました」などありません。すべてを捧げ尽くして下さったゆえに、新しい命を与えられキリストと共に生きるものとされました。この主に私たちが捧げることが出来るものはなにか。神はみ言葉を通して語っておられます。主が願っておられる出来る限りのささげものは、私たちのすべての主導権を主に渡しきる心です。私の人生のすべてが主のものとされる時、キリストのご愛の内を生きるゆえにそこには、すべてのことに対して主のみ心に反することに捕らわれることなく、主の平安を頂きつつ自由に生きる喜びが得られます。クリスマスのメッセージに応答いたしましょう。

『わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』（マタイ25章40節）

（浦和別所教会牧師）

荒野の声

▼『シャーロック・ホームズのドキュメント…創元推理文庫』に感銘を受けた。以前から模作、パロディ、またホームズやワトソンを歴史上実在する人物のように描いたものも読んでいたが、既にジャンル化していることを教えられた。▼感銘と言ったのは、これらの著者たちが、ドイルよりもホームズに通じ、ドイルよりもホームズとワトソンを愛していることだ。まあ、そうでなければバスティーシュ（この言葉も初めて知った）を著すことはできない。▼ホームズに匹敵するのはシェークスピアか。数々の贋作…模作ではなく…があり、シェークスピアが主人公の物語がある。『慈悲の心』は信仰・教会のこととも重なりお奨めだ。▼聖書・神学の世界でも同様らしい。摸作あり贋作あり、しかし残念ながら、そこには、例えばパウロに対する愛を感じ取ることが出来ない。イエス様の場合さえも。▼ドイルの原作は正典と言うそうだ。

お知らせ

「教団新報」次号四六六五・六六号を合併号として、1月17日に発行します。なお教団三局は12月24日、25日、クリスマス休暇、29日から1月2日は休業します。1月5日より通常業務となります。

総幹事　内藤留幸

Title:sinpou4664.ec7 Page:2 Date: 2013/02/27 Wed 11:37:45

隠退教師、女性教職、戒規巡り協議

今期第7回、最後の教師委員会

九月二九日～三〇日、教団会議室において、第35総会期第七回教師委員会が開かれた。

まず、「隠退教師」の理解について雲然俊美委員が発題した。そして、隠退教師は教師ではないとの理解も可能となるという現状の問題点が指摘された。当委員会としては、隠退教師は「教師の職務を退職した者」という理解に立ち、隠退教師の身分について信仰職制委員会に諮問することとした。

次に、田中かおる委員より「女性教職に関する事項」の発題があった。その中で、教師としての基本は男女とも同じであること、そして女性教職としての困難と恵みなどが語られ、また次期委員会への提案がなされ、多くの時間が割かれた。まず松井睦委員長より経過報告がなされ、続いて調査委員会の岩　隆委員長及び二名の調査委員より経過報告と所感が述べられた。

その後、当該教師に対してどのような戒規を適用するかの協議に入った。当該教師の教団教師としてあるまじき行為について、さらに教師としての倫理、被害者の状況、そして社会に与えた影響、更にはキリスト教会内に与えた深刻な影響などを考えた厳しい意見が相次いだ。一方で、戒規というものが、本来、当該教師を悔い改めへと導くための手段である点も確認された。最終的に、「免職」とすることが決まった。当該教師にその旨を報告し「教団新報」に「戒規執行の公告」を掲載することにした。

今後も課題や情報の把握に努めることが確認された。

中部教区常置委員会から出された「黛八郎教師の戒規に関する提訴」の件では、

最後に、教団常議員会からの「北村慈郎教師戒規処分申立書」について扱った。必要書類がそろっていることが確認され、協議の上、全会一致で提訴を受理した。調査委員が選出され、次期教師委員会に申し送ることが確認された。

（小宮山剛報）

基督教大韓監理会との交流再開へ

スイス協約・韓国協約合同委員会

第35総会期第五回スイス協約委員会と韓国協約委員会合同委員会が、両委員会全員出席のもと、十月二日（木）午後十二時から十六時、教団会議室で行われた。

最初に第36回教団総会に出席予定の来賓のなかで特に現在準備をすすめているスイス・韓国・日本三国間協議会に関係のある方々が居られ、総会期間中に懇談の機会を設けて同協議会への積極的参加を要望することが確認された。

さらに同三国間協議会について協議した結果、開催日を二〇一〇年十一月十一日（木）から十五日（月）とし、うち三日間を会議、他を礼拝出席と現地研修等とする事、テーマは「平和」をめぐる問題とし、開催地は首都圏および近郊、現地研修場所の候補として靖国および横須賀などとすることが決定された。同協議会開催は第37総会期となる予定であるが、次期・次々期委員会へ円滑な申し送りを行い、充実した協議会を開催すべく今後も努めることが確認された。

引き続き、第五回韓国協約委員会が行われた。今回の教団総会にしばらく交流が途絶えていた基督教大韓監理会の代表が来られる事を感謝し、三国間協議会に向けて今後も積極的に交流を深める様働きかけること、次期委員に今回同様、韓国に関わりの深いメンバーが入ることを特に申し送り事項の中で要望して行くことなどが協議、決定された。

（吉岡康子報）

理念を確認しつつ適切な支援を

第2回宣教師支援委員会

第35総会期第二回宣教師支援委員会が、九月二六日（金）十四時～十七時三〇分、教団小会議室において開催され、これをもって今総会期の委員会活動を終了した。任期中の二回の委員会と五回の実務会の開催によって、本委員会が担当している四項目（①新任宣教師オリエンテーション、②宣教師会議、③宣教師支援、④印刷物の発行）について検討・計画され、それに基づいて具体的な活動が滞りなく進められた。

今期の委員会活動を報告するにあたって特に記したいのは、「③宣教師支援」について、教会や学校に宣教師を迎えるにあたってのガイドライン『宣教師受入れへの手引き』の作成に取り組んだことである。これは、宣教師を必要としている教会・学校が新規に宣教師を招聘するために、また、宣教師の受入れ機関である教会・学校に宣教師が任務に専念しやすい環境を整えてもらうために、現場で遭遇する諸問題への対処方法をまとめたものである。「学校を任地とする宣教師受入れ」「宣教師を教会に迎えるための心得」「教会・教区を任地とする宣教師受入れ」という三つの項目をたて、任地での具体的な働き、教会生活、事務的な手続き等、赴任して来られる宣教師の働きと生活を支援する体制作りについてまとめている。

宣教師支援委員会という新しい組織のもとで、これまで宣教協力協議会（CoC）が行なってきた働きの一部を担ってきたが、殊に宣教師による宣教協力の理念を確認しつつ、現場の状況理解と職務遂行のための条件整備、それに伴う宣教師個人の諸問題等に対応し、適切な支援を行なうことに努力した。今後とも、これらの働きを継続すると共に、新たに起こるかも知れない諸問題に対して有効に対処するよう検討していくことが必要であろう。

（立花慎一報）

神奈川教区の諮問に答申

第6回信仰職制委員会

第35総会期第六回信仰職制委員会が九月二九日（月）～三〇日（火）に教団会議室で行われた。

式文改訂小委員会の岡本知之委員長から『日本基督教団式文（試用版）2』に関して、前回当委員会から依頼した検討の結果を聞き、信仰職制委員長名で記す「序文」の文案を検討承認し、同書の印刷発行を行うことを承認した。

神奈川教区から諮問『伝道所での洗礼執行について』と題する貴答申について」があった。

これは玉川平安教会役員会より出された質問「伝道所での洗礼執行について」への前回当委員会の答申が、教規一二二条および現在教団において行われている事務手続きとの整合性を欠き、既存の伝道所の総会や役員会の存在を否定するものではないか、との問いである。

これに対して、教規の厳密な読みによれば前回答申は決して整合性を欠くものではないこと、また教規の精神からして、伝道所において行われる総会や役員会を否定するものではないこと等を内容とする答申をすることを決定した。

関東教区と大阪教区からも同じ答申に関して、これの撤回を要望する「要望書」が出されたが、これらに対して神奈川教区への答申と同じ趣旨の「お答え」を送ることとした。

紅葉坂教会北村慈郎牧師および同教会役員会から出された『「教師退任勧告議案」および『戒規申し立て議案』に対する違法性検証についての要望』については、違法性は認められないとの回答をするという意見と、「要望」に回答する必要なしとする意見とが同数となり、当委員会としては回答不可能であると判断した。

（大村栄報）

重要な諮問を受け検討を重ねる

消息

岡　和夫氏（隠退教師）

七月十一日、逝去。九六歳。広島県に生まれる。一九五一年関西学院大学神学部卒業後、西淀川教会に赴任。その後六四年から二〇〇一年まで大阪暁明館病院伝道所牧師を務め、隠退した。遺族は妻の千代子さん。

吉田国彦氏（無任所教師）

十月二日、逝去。六五歳。京都府に生まれる。一九六七年東京神学大学大学院修了後、聖徒教会に赴任。その後大阪のぞみ教会、河内長野みぎわ教会、泉大津教会牧師を務めた。遺族は妻の三知子さん。

事務局報

正教師転入

佐原玲子（二〇〇八・一〇・二〇常議員会承認）

教師異動

新島　辞（兼担）外山志都子
枚方くずは就（代）平田　義
ユニオン日本語教会　辞（外）浅田容子
〃　就（外）相良昌彦
犀川　辞（主）梅崎浩二
〃　就（代）本多香織
大牟田正山町　就（主）梅崎浩二
長崎飽之浦辞（主）村井　仁
長岡京　辞（主）村上　宏
〃　就（主）韓　守信
むさし小山　辞（担）井上とも子
上星川　就（代）牧野信次
聖愛会松山ベテル病院　就（教）村井　仁
東洋英和女学院大学　辞（教）陶山義雄
富坂キリスト教センター　辞（教）薛　恩峰
日本クリスチャンアカデミー関東活動センター　就（教）薛　恩峰
西成　辞（担）金井愛治
〃　就（主）金井愛治
梅花女子大学　辞（教）茂　義樹
愛北　就（代）大住　元
ロゴス　辞（担）山本　護
伊勢崎　辞（主）松浦義夫
〃　就（代）竹前　昇
延岡使徒　辞（主）市来章三
〃　辞（担）中山契生
〃　就（主）中山契生
福岡女学院看護大学　就（教）金田俊郎
百人町　辞（担）岡田則子
スリランカ　ランカ神学大学　就（外）岡田則子
青山学院大学　就（教）塩谷直也
甲陽園　就（代）林　邦夫
東北学院中学・高校　就（教）松島恵里
恵泉女学園大学　辞（教）安倍愛樹
稲城　就（担）安倍愛樹

教師隠退

市来章三、泉　隆、小林　茂

教師退任

大沢章夫

教師休職

大西英恵

教師免職

黛　八郎

教会建設

千里聖愛（第二種より第一種教会へ）
高槻日吉台（第二種より第一種教会へ）

教会所在地名変更

長崎銀屋町　長崎市銀屋町一－五
住道一粒　大東市深野四－三－四

第36回教団総会開会礼拝献金報告

第36回教団総会開会礼拝の献金は四四一、四二六円でした。感謝をもってご報告いたします。

◇公　募◇

ドイツ・教会の日

◎日本基督教団を代表してブレーメンで開催のドイツ・プロテスタント教会の日（来年5月20日?24日）に参加
◎募集　教団の信徒又は教職、2名
◎自己負担　往復旅費
◎先方負担　宿泊・参加費
◎応募期限　2月20日（必着）、書類選考あり
◎問合先　総幹事室（TEL03－3207－8768）

◇公　募◇

ドイツ留学奨学金

◎資格　神学・基督教学で修士課程修了程度
◎募集奨学生　若干名
◎応募期限　1月19日
◎問合せ先　NCC大津健一（TEL03－3203－0372）

Title:sinpou4664.ec7 Page:3 Date: 2013/02/27 Wed 11:38:19

常議員（信徒）プロフィール

?誕生年
?出身地
?信仰歴（受洗年、受洗教会、教師名）
?趣味
?モットー
?抱負

◎五十音順

伊東永子（いとうえいこ）

神奈川教区
翠ケ丘教会

?人生楽ありゃ、苦もあるさ!!
?教団がいかに各教会に仕え、支えていくべきかを、自分が身をおいている現場から見つめていきたいと思っています。
?1947年
?東京都渋谷
?1963年・聖ケ丘教会・稲垣守臣牧師
?三線（サンシン）

江本義一（えもとよしかず）

大阪教区
茨木東教会

?1935年
?山口県岩国市
?1960年・新居浜西部教会（愛媛県）・藤川武治牧師
?毎日ではないが、かなり遠くまで散歩すること。歩きながら色々なことを考え、纏める。
?主イエス・キリストの真の教会を建てることの為の行動であり、発言でありたい。
?教団の一致は信仰内容の一致なくしてはあり得ない。今は人間の知恵が信仰になっているのではないか。教団に真の信仰が確立する時、一致が実現する。

大杉弘（おおすぎひろし）

中部教区
若草教会

?温故知新
?「十字架が遠くなり、小さくなり、キリストのお姿が見えなくなっていく」と嘆き、悲しむ信仰の友の声が脳裏を離れない。
その一人のために微力を尽くしたい。
?1933年
?石川県
?1973年・若草教会・井上良彦牧師
?トレッキング

岡田義信（おかだよしのぶ）

東京教区
田園調布教会

?生涯現役で仕事を続けること。（知的財産関係業務）
?聖餐の執行を含め、教団の正常化が回復されるためには、信仰告白と教憲・教規が遵守されることが必須であると考える。そのために努力をされておられる山北議長をはじめとする現在の三役を少しでも支えるお手伝いをしたい。
?1939年
?東京都
?1940年（幼児洗礼）
1952年（信仰告白）・田園調布教会・岡田五作牧師
?テニス・ゴルフ（但し過去）

小林貞夫（こばやしさだお）

東海教区
日下部教会

?1929年
?山梨県笛吹市石和町
?1931年・日下部教会・小野善太郎牧師
?最近は趣味「教会」ということにしている。
?全国信徒会を開きたい。150年記念事業を無事に終らさせる。
?年間受洗者が年間死亡者を下回る時態を迎えている。何としても伝道力を回復しなければならない。教師も信徒も再出発したい。

斎藤仁一（さいとうじんいち）

東北教区
山都教会

?読書、映画、山歩き
?「喜ぶものと共に喜び、泣くものと共に泣く」
?総会議決を重んじ、お互いの意見を出し合い内容を深め、結論を出していく「会議制」の中で議論をしていきたい。
?1952年
?山都町（会津地方北西部）
?1973年・山都教会・渡辺晋牧師

鈴木功男（すずきいさお）

東京教区
目白教会

?「感謝と奮起」
?宣教命令の妨げになっているものが何かあるのでしょうか、信徒としての役割を示されつつ、主のご用の為に仕えさせていただきます。
?1934年
?名古屋市
?1961年・目白教会・篠原金蔵牧師
?山歩き、音楽、企画癖がある

髙橋豊（たかはしゆたか）

西東京教区
白鷺教会

?主にあってすべてを見つめ、主にしたがい、主を愛しぬく。
?①教師とともに重荷を担う。
②教師と信徒の絆が深められてゆく教団。
③教師を立て教師の生活を守ることを最重要視。
④教団年金を守りぬく。
?1932年
?愛媛県西条市
?1955年・岩国教会・高倉徹牧師
?ピアノ演奏・バッハ教会カンタータを毎日聴く

津村正敏（つむらまさとし）

兵庫教区
明石教会

?在って、忍耐・勇気・希望・自由・解放
?この世に在って、主イエス・キリストの福音を証しする教会・教団として、主によって託された様々な今日の宣教の課題を共に担っていくものでありたい。
《詩篇133編1節（口語訳）》
?1937年
?兵庫県明石市
?1958年・明石教会・福井邦蔵牧師
?音楽鑑賞
?主イエス・キリストに

難波幸矢（なんばさっや）

東中国教区
光明園家族教会

なくなるために行動し、神から頂く平安をお伝えするために証をすること。
?上記のため人と出会い続け、考えが固定化しないよう心がける。一つ一つの事象を繋いでいくと根っこの共通点が見えてくる。そのためにもあらゆる人と連帯しつつ共闘したい。
?1944年
?愛媛県松山市
?1961年・松山教会・山下萬里牧師
?作詞、作曲、歌うこと
?差別や偏見が少しでも

東谷誠（ひがしたにまこと）

大阪教区
いずみ教会

?「部落差別がなくなりますように、全ての差別がなくなりますように」と願い、祈り、声をあげ、行なっていく。
?一人一人が大切にされるそのような教団であってほしいと願い、全ての差別がなくなることを願い、平和を願い歩んでいきたいです。
?1951年
?大阪府
?1965年・いずみ教会・佐治良三牧師
?旅行、みんなと楽しく集まり飲むこと。

望月克仁（もちづきかつひと）

神奈川教区
鎌倉雪ノ下教会

?家族スキー
?一日一日を精一杯生かされたいと願います。
?「無私」を信条に、託された課題を担いつつ、召されるままにお仕えしたいと祈り願います。
?1932年
?東京
?1961年・鎌倉雪ノ下教会・松尾造酒蔵牧師

和田献一（わだけんいち）

関東教区
氏家教会

人が例外なく包み込まれていく教団の合同を目指す。異なる様々な立場の人の意見が尊重され、丁寧に対話を重ねる中で、教団の意思形成がなされるべき。その過程で信頼と協力が生み出され、「教団に帰属している」意識が育まれるから。
?1947年
?東京都
?1960年・氏家教会・和田正牧師
?教団に連なるすべての

日本基督教団公式サイトについて

この度、6月からの試運転期間を経て、正式に「日本基督教団公式サイト」が稼働する事となりました。

主に教団が新任教師オリエンテーションで配布する資料や公式の発行物（教団ニュースレター・教団新報）を掲載していく他、教団からのお知らせなどを、必要に応じて掲載していく事となります。

また、教区・各委員会とのリンクも計画しています。このサイトを通じて、信徒の方の教会生活が豊かになり、教団からの情報発信が円滑に行われるよう、祈っています。

広報センター委員会

ＵＲＬ　http://www.uccj.or.jp

Title:sinpou4664.ec7 Page:4 Date: 2013/02/27 Wed 11:38:36

植村正久生誕150年記念会

―富士見町教会で―

「植村正久生誕150周年記念会」が、十一月一〇日、牧師としての生涯を送った富士見町教会を会場に開催された。記念礼拝の司式・説教に当たった同教会倉橋康夫牧師は、フィリピの信徒への手紙3章12～18節に基づいて、「神の志に生きる」と題し、ひたすら御言葉に聞くという姿勢を貫く説教を語り、「日本のプロテスタント教会に植村正久という人物を与えて下さり、力として下さったことを感謝します。その遺産を継承し、伝道を推進することが出来ますように」と祈った。

武田清子氏が呼びかけ人を代表して挨拶し、植村の人格と伝道の志について、「天皇の家来に対して神の家来」を自負したこと、「日本最初の女性教職者を育てた」ことなどを指摘し、「開明的な開拓者であった」と、興味深いエピソードの数々を語った。

主題講演は、大木英夫聖学院理事長による「植村正久生誕150年と戦後日本の未来」。東京神学大学図書館に日本プロテスタント資料を収集した経緯から始めて、氏と植村との関わりを述べた。また、自身の幼年学校から大戦にいたる体験と明治維新期のそれとは重なるものがあるとし、「敗戦から全てが始まった」と語り講演が立ち上げられた。

発題・星野靖二氏、戒能信生氏、五十嵐喜和氏

「与えられた時間と予定していた時間との折り合いがつかないだろう」ことを危惧しながら、時にやや早口で、独自の世界観と植村とを重ね合わせて、話題は多岐に渡った。植村が宣教師に触発され垂直次元の発見者となった、つまり祈りを体験したこと、その歴史観の土台は愛国ではなく救国であること、官途につかず伝道したこと、等々、植村論にとどまらず、植村の時代に踏み込んで、彼の思想・信仰の背後にあるものを論じた。仕掛けの大きいイリュージョンの舞台が、ふと連想させられ、独特の大木英夫ワールドに引きづり込まれるような感さえした。

項目だけを挙げても紙数が足りない。他にも、プロイセン崩壊と国際連盟からナチズムの台頭まで、関東大震災、マルキシズム等々。

何かしらの手違いから、大木氏が予定していた講演時間が半分以下になってしまったことは、実に残念なことだった。

発題者が三名立てられ、日本キリスト教会茅ヶ崎東教会牧師・五十嵐喜和氏…肩書きは全てプログラムの《講師紹介》に依る…は、〈植村正久の「系統神学」における教会論と今日の課題〉と題して、「系統神学」こそが植村を読み解くキーワードだとし、『福音新報』に掲載された植村論文などを根拠に、その教会論に迫った。

講演・大木英夫氏

東駒形教会牧師・戒能信生氏は、「植村正久の志の継承」と題し、日本のプロテスタント教会における植村の圧倒的な存在を、客観的な視点から観察し、従来からも指摘されてきた、教会の中で自己完結してしまう、という批判をも含めて、植村の功罪を、歴史的な事実に照らして、冷静に振り返った。

植村正久…1858（安政5）～1925（大正14）

國學院大學助教・星野靖二氏は、「植村正久と近代日本の宗教思潮」と題して論じた。その演題から推察できるように、教会の中での植村論に比較すると、一端大きくカメラを引き、より広い時代の画面の中心に捉え、焦点を合わせてから、改めてズームアップした。時代の中での教会そのものの位置付けについても、新鮮な思いで教えられた。

発題者も、与えられた時間を窮屈に感じていたようだ。植村の世界を、三時間に凝縮するのは無理があったかも知れない。しかし、新しい窓が与えられたように感じられた。

協議の時間には、植村の伝道活動と社会活動について等の質疑がなされ、発題者のアドバイスも得て盛り上がったが、ここでも時間が限られた。

出席者数は一〇〇名を少し超えるくらい。年配の方が目立った。語る者にも、聴く者にも、深い思い入れがある、熱気のこもる記念会であった。（新報編集部報）

西中国教区部落解放現場研修

―同悲同苦で生きる―

西中国教区は部落解放現場研修会を、八月三一日、九月一日、広島キリスト教社会館と尾長あいあいプラザで開いた。出席者四八名。

広島牛田教会西嶋佳弘牧師の説教による開会礼拝。

次いでの社会館アワーは窪田晋治保育所長がスライドを用いて報告、そして夕食で楽しい交流。

主題講演は、「部落差別と自己疎外」という題で、部落解放同盟広島県連副委員長得田正明さんが最近起った二つの事件を話した。

一つは、呉市連続大量差別紙片ばらまき事件で、二〇〇四年から四年間、「誰々は部落民」という差別ビラ一三七、二三九枚を呉市中心にばらまいた事件である。

もう一つは、「呉市離婚強要差別事件」である。

二四年間夫婦仲良く暮していたのに、夫の両親が被差別部落出身の妻に離婚を強要し、別れさせた。

結末は、双方とも不幸に終った悲しい事件であった。

両事件と取り組んだ講師の話は、皆の胸を熱くした。

差別は、人間の心を疎外するものである。だから、部落の人も、非部落の人も、同じ地域の中では、同悲同苦の思いで暮したらいいと強調された。

同悲同苦ときいて、イエスが、喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさいとの教えを思い浮かべた。

翌日はJR広島駅近くの尾長地区あいあいプラザに行き、野田末広さん（同盟尾長支部長）から地区の歴史と現状についてきいた。近隣の人で差別意識の強い人びとが、尾長という名をはずして、町名を変える運動をしたり、神社の名すら変えようとして失敗した事をきいた。

一時間程町内の被差別の実情を見させてもらった。プラザに戻り、質疑応答、意見交換の時を持った。

三吉小祈牧師（広島府中教会）の説教で閉会礼拝。

教区議長柴田もゆる牧師（廿日市教会）が「二日間の現場研修は、有意義だった。今もある部落差別をしっかり、受けとめ、差別をなくすため、励みましょう」と締め括りの挨拶をした。

（東岡山治報）

社会事業奨励日メッセージ

日本基督教団は、社会活動基本方針に『教会と社会福祉事業との相互理解と協力を推進する』と謳い、十二月第一日曜日を「キリスト教社会事業を覚えて祈る日」と定めています。

「伝道とは聖書的な聖化の道を全土に浸透させること」と十八世紀英国のある教会指導者は心得ました。「聖化の道」とは、今日流行の言葉では「霊性」と言い換えることができましょう。すなわち、御言葉によって養われて、聖化へと向かう継続的な力として私たちの内に造られる霊的な気質です。それは、神の国を待つ心であり、個々人のことにとどまらず、浸透して教会的な交わりや社会を形成していきます。そのような教会的霊性をかの指導者は祈り求めたのでした。

来年、私たちは日本伝道150年として記念いたします。北米諸教会から派遣された宣教師の方々の働きは、教会の建設、キリスト教学校や社会事業施設の開設へと向かい、神の国を待つ者たちの歴史となりました。私たちはその歩みの一こまに共に加えられて記念の年を迎えます。この時、私どもに与えられている霊性を養い、伝道への構えを充実したいと願います。そして、キリスト教社会事業を教会の大切な働きとして、あらためて、しっかりと覚えたい、そう思います。

諸施設で「共に生きる」お一人お一人、その関係の方々、また、労苦を惜しまず奉仕しておられる兄弟姉妹のために祈りましょう。昨今の経済事情のもと、ご苦労も多いことかと思いますが、志が高く保たれ、必要が満たされますように。私たちも為すべきことがあればそれを見出したいと願います。

二〇〇八年十二月七日

第35総会期日本基督教団社会委員会委員長　張田　眞

ひとときの人

有賀（あるが）　貞（ただし）さん

人生をより意味あるものへ

有賀さんが受洗したのは二〇〇六年のクリスマス。遡ること四〇年程前から、クリスチャンの妻と共に教会に通い、自分なりにはイエス・キリストの神を信じていると思っていた。しかし学園紛争期にはキリスト教大学で、クリスチャン学徒たちに失望するという経験もした。振返って有賀さんは「古来、敬虔な賢者たちの集まりにも争いや対立があり、人としての弱さを露にするものだということを十分認識していなかった」という。

その有賀さんを受洗に導いたきっかけの一つは、聖学院大学大学院へ勤務したことであった。祈りと讃美歌のある入学式に感激し、「敬虔に学問する精神」を実感した。また古屋安雄牧師の「信仰を告白して教会員になっていない者は、こうもりのようなものである、教会に属していなければだめである」との言葉を重く受け止めた。それまでも長い間、妻と共に教会の礼拝へ出席し、度々神に助けを求めて祈ってきたが、使徒信条の言葉通りには信仰告白することができないという中途半端な心持があった。

しかし人生を省みて、自分の人生、また妻の人生を、受洗を通してより意味あるものとし、共に過ごす残された日々をより深めたいと願うようになった。また教会での加藤哲牧師の説教は、惨めさ、罪深さを感じている者に、神の愛によってのみ立ち上がる勇気を与えるものであり、牧師の祈りに心を合わせているうちに、使徒信条の信仰告白へ、受洗へと導かれた。有賀さんは今、次のように語る。「妻と子どもを与えられ、仕事を与えられ、七〇歳をこえて生かされ、そしてまだ働きの場を与えられている。これは神の思し召しであり、キリストが私を捉えて下さったからである」と。その背後には、人生の伴侶による長年の祈りがあった。さらに信仰告白の姿勢として「今日の復古的ナショナリズムと精神的に一線を画す」と語る。そこには福音信仰により究極的社会貢献をなす、クリスチャン社会科学者の姿勢が現れていた。

1931年生。長野県出身。聖学院大学大学院教授、西東京教会員